旺文社文庫

こころ

（他）文鳥

夏目漱石著

「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたって、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人たらんとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化やすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この書にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長　赤尾好夫

埼玉県立浦和図書館
貸出禁止
A16634
蔵書

編集顧問　整　茅　誠司　木村　毅
編集委員　五十音順　良平　中島健蔵　森戸辰男

旺文社文庫　四郎　他一編　150円

昭和44年7月1日　初版発行
昭和44年6月1日　重版発行

著　者　夏目漱石
発行者　鳥居正博
印刷所　岩岡印刷株式会社

発行所　株式会社　旺文社
162 東京都新宿区横寺町
電話 東京 (03) 267-1111〔代〕

(中村印刷・三宅印刷・穴口製本)

610-21　403098
© 旺文社 1966
(許可なしに転載，複製することを禁じます)

落丁・乱丁・不良本はお取り替えします
書店または本社に直接お申し出ください

旺文社文庫

こころ

（他）文鳥

夏目漱石著

旺文社

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

こころ
上 先生と私 五
中 両親と私 七
下 先生と遺書 九八
一四四

文鳥 二七七

解説
人と文学 稲垣達郎(いながきたつろう) 二九七
作品解説 二九七
作品鑑賞 三〇五
『文鳥』について 三一一
『こころ』について 三一九
漱石と「新思潮(しんしちょう)」 堀 秀彦 三二〇
代表作品解題 松岡 譲 三二三
参考文献 三二六
年譜 三二九
三三〇

挿絵 松野一夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

原文は新かなづかいに改めたほか、原文の表現をそこなわない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。また、難解な語句や事項には、小活字で傍注を加えた。

（編集部）

こ

こ

ろ

上　先生と私

一

私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名はうち明けない。これは世間をはばかる遠慮というよりも、そのほうが私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起こすごとに、すぐ「先生」と言いたくなる。筆を執っても心持ちは同じことである。よそよそしい頭文字などはとても使う気にならない。

私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であった。暑中休暇を利用して海水浴に行った友達からぜひ来いという端書を受け取ったので、私は多少の金を工面して、出かけることにした。私は金の工面に二三日を費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日とたたないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国もとから帰れという電報を受け取った。電報には母が病気だからと断わってあったけれども友達はそれを信じなかった。友達はかねてから国もとにいる親たちにすすまない結婚を強いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若すぎた。それに肝心の当人が気に入らなかった。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようと相談をした。私にはどうしていいかわからなかった。けれども実際彼の母が病気であるとすれば彼はもとより帰るべ

きはずであった。それで彼はとうとう帰ることになった。せっかく来た私は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだだいぶ日数があるので、鎌倉におってもよし、帰ってもよいという境遇にいた私は、当分もとの宿に留まる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子で金に不自由のない男であったけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変わりもしなかった。したがって一人ぼっちになった私は別に恰好な宿を探すめんどうもたなかったのである。

宿は鎌倉でも辺鄙な方角にあった。玉突きだのアイスクリームだのというハイカラなものには長い暇を一つ越さなければ手が届かなかった。車で行っても二十銭は取られた。けれども個人の別荘はそこここにいくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるにはしごく便利な地位を占めていた。

私は毎日海へはいりに出かけた。古い燻ぶり返った藁葺の間を通り抜けて磯へ下りると、この辺にこれほどの都会人種が住んでいるかと思うほど、避暑に来た男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の中が銭湯のように黒い頭でごちゃごちゃしていることもあった。その中に知った人を一人ももたない私も、こういうにぎやかな景色の中につつまれて、砂の上に寝そべってみたり、膝頭を波に打たしてそこいらを跳ね回るのは愉快であった。

私は実に先生をこの雑沓の間に見つけ出したのである。その時海岸には掛茶屋が二軒あった。私はふとした機会からその一軒のほうに行き慣れていた。長谷辺に大きな別荘をかまえている人と違

(1) 田のあいだの道。あぜ道。 (2) 道路わきによしずなどをさしかけて、通行人を、相手とする茶屋。腰掛け茶屋。ここは海水浴の脱衣場を兼ねる。 (3) 神奈川県鎌倉市長谷。有名な露座の大仏がある。

って、めいめいに専有の着換場をこしらえていないここいらの避暑客には、ぜひともこうした共同着換所といったふうなものが必要なのであった。彼らはここで茶を飲み、ここで休息するほかに、ここで海水着を洗濯させたり、ここで塩はゆい身体を清めたり、ここへ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持ち物を盗まれる恐れはあったので、私は海へはいるたびにその茶屋へ一切を脱ぎ棄てることにしていた。

二

私がその掛茶屋で先生を見た時は、先生がちょうど着物を脱いでこれから海へ入ろうとするところであった。私はその時反対に濡れた身体を風に吹かして水から上がって来た。二人の間には目をさえぎる幾多の黒い頭が動いていた。特別の事情のない限り、私はついに先生を見逃したかもしれなかった。それほど浜辺が混雑し、それほど私の頭が放漫であったにもかかわらず、私がすぐ先生を見つけ出したのは、先生が一人の西洋人を伴れていたからである。

その西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るやいなや、すぐ私の注意をひいた。純粋の日本の浴衣を着ていた彼は、それを床几の上にすぽりと放り出したまま、腕組みをして海のほうを向いて立っていた。彼はわれわれのはく猿股一つのほか何物も肌に着けていなかった。私にはそれが第一不思議だった。私はその二日前に由井が浜まで行って、砂の上にしゃがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めていた。私の尻をおろしたところは少し小高い丘の上で、そのすぐ傍がホ

(1) 昔、陣中や狩り場などで用いた携帯用折りたたみ式の腰掛け。ここは涼み台などにするふつうの腰掛け。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

テルの裏口になっていたので、私のじっとしている間に、だいぶ多くの男が塩を浴びに出て来たが、いずれも胴と腕と股は出していなかった。女はことさら肉を隠しがちであった。たいていは頭に護謨製の頭巾をかぶって、海老茶や紺や藍の色を波間に浮かしていた。そういうありさまを目撃したばかりの私の眼には、猿股一つですましてみんなの前に立っているこの西洋人がいかにも珍らしく見えた。

彼はやがて自分の傍を顧みて、そこにこごんでいる日本人に、一言二言何か言った。その日本人は砂の上に落ちた手拭を拾い上げているところであったが、それを取り上げるやいなや、すぐ頭を包んで、海のほうへ歩き出した。その人がすなわち先生であった。

私は単に好奇心のために、並んで浜辺を下りて行く二人の後ろ姿を見守っていた。すると彼らはまっすぐに波の中に足を踏み込んだ。そうして遠浅の磯近くにわいわい騒いでいる多人数の間を通り抜けて、比較的広々したところへ来ると、二人とも泳ぎだした。彼らの頭が小さく見えるまで沖のほうへ向いて行った。それから引き返してまた一直線に浜辺までもどって来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体を拭いて着物を着て、さっさとどこへか行ってしまった。

彼らの出て行ったあと、私はやはりもとの床几に腰をおろして煙草を吹かしていた。その時私はぼかんとしながら先生のことを考えた。どうもどこかで見たことのある顔のように思われてならなかった。しかしどうしてもいつどこで会った人か想い出せずにしまった。

その時の私は屈託がないというよりむしろ無聊に苦しんでいた。それで翌日もまた先生に会った時刻を見はからって、わざわざ掛茶屋まで出かけてみた。すると西洋人は来ないで先生一人麦藁帽

をかぶってやって来た。先生は眼鏡をとって台の上に置いて、すぐ手拭で頭を包んで、すたすた浜を下りて行った。先生が昨日のように騒がしい浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎだした時、私は急にそのあとが追いかけたくなった。私は浅い水を頭の上まで跳ねかして相当の深さのところまで来て、そこから先生を目標に抜手を切った。すると先生は昨日と違って、一種の弧線を描いて、妙な方向から岸のほうへ帰りはじめた。それで私の目的はついに達せられなかった。私が陸へ上がって雫のたれる手を振りながら掛茶屋に入ると、先生はもうちゃんと着物を着て入れちがいに外へ出て行った。

三

私は次の日も同じ時刻に浜へ行って先生の顔を見た。その次の日にもまた同じことをくり返した。けれども物を言いかける機会も、挨拶をする場合も、二人の間には起こらなかった。その上先生の態度はむしろ非社交的であった。一定の時刻に超然として来て、また超然と帰って行った。周囲がいくらにぎやかでも、それにはほとんど注意を払う様子が見えなかった。最初いっしょに来た西洋人はその後まるで姿を見せなかった。先生はいつでも一人であった。

ある時先生が例のとおりさっさと海から上がって来て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着ようとすると、どうしたわけか、その浴衣に砂がいっぱいついていた。先生はそれを落とすために、後ろ向きになって、浴衣を二三度振った。すると着物の下に置いてあった眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白絣の上へ兵児帯を締めてから、眼鏡のなくなったのに気がついたとみえて、急にそ

こいらを探しはじめた。私はすぐ腰掛の下へ首と手を突っ込んで眼鏡を拾い出した。先生はありがとうと言って、それを私の手から受け取った。

次の日私は先生のあとにつづいて海へ飛び込んだ。そうして先生といっしょの方角に泳いで行った。二丁ほど沖へ出ると、先生は後ろをふり返って私に話しかけた。広い蒼い海の表面に浮いているものは、その近所に私ら二人よりほかになかった。そうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照らしていた。私は自由と歓喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り狂った。先生はまたぱたりと手足の運動をやめて仰向けになったまま浪の上に寝た。私もそのまねをした。青空の色がぎらぎらと眼を射るように痛烈な色を私の顔に投げつけた。「愉快ですね」と私は大きな声を出した。

しばらくして海の中で起き上がるように姿勢を改めた先生は、「もう帰りませんか」と言って私をうながした。比較的強い体質をもった私は、もっと海の中で遊んでいたかった。しかし先生から誘われた時、私はすぐ「ええ帰りましょう」と快く答えた。そうして二人でまたもとの路を浜辺へ引き返した。

私はこれから先生と懇意になった。しかし先生がどこにいるかはまだ知らなかった。

それから中二日おいてちょうど三日目の午後だったと思う。先生と掛茶屋で出会った時、先生は突然私に向かって、「君はまだだいぶ長くここにいるつもりですか」と聞いた。考えのない私はこういう問いに答えるだけの用意を頭の中に蓄えていなかった。それで「どうだかわかりません」と答えた。しかしにやにや笑っている先生の顔を見た時、私は急にきまりが悪くなった。「先生は？」

（1）丁は町と同じで距離の単位。約一〇九メートル。

と聞き返さずにはいられなかった。これが私の口を出た先生という言葉の始まりである。

私はその晩先生の宿を尋ねた。宿と言っても普通の旅館と違って、広い寺の境内にある別荘のような建物であった。そこに住んでいる人の先生の家族でないこともわかった。私が先生先生と呼びかけるので、先生は苦笑いをした。私はそれが年長者に対する私の口癖だと言って弁解した。私はこの間の西洋人のことを聞いてみた。先生は彼の風変わりのところや、もう鎌倉にいないことや、いろいろの話をした末、日本人にさえあまり交際をもたないのに、そういう外国人と近づきになったのは不思議だと言ったりした。私は最後に先生に向かって、どこかで先生を見たように思うけれども、どうしても思い出せないと言った。若い私はその時暗に相手も私と同じような感じをもっていはしまいかと疑った。そうして腹の中で先生の返事を予期してかかった。ところが先生はしばらく沈吟したあとで、「どうも君の顔には見覚えがありませんね。人違いじゃないですか」と言ったので私は変に一種の失望を感じた。

四

私は月の末に東京へ帰った。先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずっと前であった。私は先生と別れる時に、「これからおりおりお宅へ伺ってもよござんすか」と聞いた。先生は単簡にただ「ええいらっしゃい」と言っただけであった。その時分の私は先生とよほど懇意になったつもりでいたので、先生からもう少し濃やかな言葉を予期してかかったのである。それでこの物足りない返事が少し私の自信を傷めた。

私はこういうことでよく先生から失望させられた。先生はそれに気がついているようでもあり、またまったく気がつかないようでもあった。私はまた軽微な失望をくり返しながら、それがために先生から離れて行く気にはなれなかった。むしろそれとは反対で、不安に揺かされるたびに、もっと前へ進みたくなった。もっと前へ進めば、私の予期するあるものが、いつか眼の前に満足に現われてくるだろうと思った。私は若かった。けれどもすべての人間に対して、若い血がこう素直に働こうとは思わなかった。私はなぜ先生に対してだけこんな心持ちが起こるのかわからなかった。それが先生の亡くなった今日になって、はじめてわかってきた。先生は始めから私をきらっていたのではなかったのである。先生が私に示したときどきのそっけない挨拶や冷淡に見える動作は、私を遠ざけようとする不快の表現ではなかったのである。傷ましい先生は、自分に近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだからよせという警告を与えたのである。他のなつかしみに応じない先生は、他を軽蔑する前に、まず自分を軽蔑していたものとみえる。

私はむろん先生を訪ねるつもりで東京へ帰って来た。帰ってから授業の始まるまでにはまだ二週間の日数があるので、そのうちに一度行っておこうと思った。しかし帰って一日三日とたつうちに、鎌倉にいた時の気分がだんだん薄くなって来た。そうしてその上に彩られる大都会の空気が、記憶の復活に伴う強い刺激とともに、濃く私の心を染めつけた。私は往来で学生の顔を見るたびに新しい学生に対する希望と緊張とを感じた。私はしばらく先生のことを忘れた。

授業が始まって、一か月ばかりすると私の心に、また一種の弛みができてきた。私はなんだか不足な顔をして往来を歩きはじめた。物欲しそうに自分の室の中を見回した。私の頭にはふたたび先

生の顔が浮いて出た。私はまた先生に会いたくなった。

はじめて先生の宅を訪ねた時、先生は留守であった。二度目に行ったのは次の日曜だと覚えている。晴れた空が身にしみ込むように感ぜられるいい日和であった。その日も先生は留守であった。鎌倉にいた時、私は先生自身の口から、いつでもたいてい宅にいるということを聞いた。むしろ外出ぎらいだということも聞いた。二度来て二度とも会えなかった私は、その言葉を思い出して、理由もない不満をどこかに感じた。私はすぐ玄関先を去らなかった。下女の顔を見て少し躊躇してそこに立っていた。この前名刺を取り次いだ記憶のある下女は、私を待たしておいてまたうちへはいった。すると奥さんらしい人が代わって出て来た。美しい奥さんであった。

私はその人から丁寧に先生の出先を教えられた。先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地(1)にある或仏へ花を手向けに行く習慣なのだそうである。「たったいま出たばかりで、十分になるか、ならないかでございます」と奥さんは気の毒そうに言ってくれた。私は会釈して外へ出た。にぎやかな町のほうへ一丁ほど歩くと、私も散歩がてら雑司ヶ谷へ行ってみる気になった。先生に会えるか会えないかという好奇心も動いた。それですぐ踵を回らした。

五

私は墓地の手前にある苗畠の左側からはいって、両方に槭を植えつけた広い道を奥のほうへ進んで行った。するとその端れに見える茶店の中から先生らしい人がふいと出て来た。私はその人の眼

(1) 東京都豊島区にある墓地。漱石はこの墓地に葬むられた。小泉八雲・島村抱月ほか著名人の墓がある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong